

## 一九七七年以前出土の木簡(五)

### 奈良・藤原宮跡

- 1 所在地 奈良県橿原市醍醐・高殿町
  - 2 調査期間 一九六六年(昭41)二月～一九六九年(昭44)三月
  - 3 発掘機関 奈良県教育委員会
  - 4 調査担当者 小島俊次、のち伊達宗泰
  - 5 遺跡の種類 宮殿・官衙跡
  - 6 遺跡の年代 七世紀末～八世紀初頭
  - 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要
- 発掘調査の経緯

一九六六年一月、国道一六五号線橿原バイパスが、閣議決定された。その予定路線が、大宮土壇の北方域で、藤原宮の内裏地域を横切る可能性が大きいため、奈良県教育委員会により、上記の期間で、緊急発掘調査が行われた。その結果、関係各機関の配慮と、考古学、古代史学の緊密な相互協力により、ほぼ、藤原宮の範囲が明らかと

なり、藤原京についても、大和の古道との関連が想定されるに至った。さらに、一九六七年二月下旬、木簡が出土し、以後調査終了までに、木簡一四六一点、削屑六六三点が検出された。これらの木簡は、『日本書紀』が編纂される以前の生の資料であるだけに、多くの新知見をもたらした。郡評論争の解決も、その一である。その後、藤原宮跡の発掘調査は、奈良国立文化財研究所により継続して行われることになり、現在に至っている。

上記のように、奈良県教育委員会によって行われた藤原宮跡発掘調査に際し、総計二二二四点の木簡・削屑が出土した。このうち、一字でも判読できるものは、約三〇〇点に過ぎない。これらの木簡・削屑の整理・解説には岸俊男が当り、和田萃が手伝った。また、初期の段階には、奈良国立文化財研究所の方々に御援助いただいた。主要な木簡・削屑については、『藤原宮跡出土木簡概報』において、一九六七年々末以前に出土したものから、七〇点余を選び、木簡写真に釈文と解説を付して公刊した。また、『藤原宮』においては、主に一九六八年春に出土したものから、一三四点を選び、木簡写真

# 1977年以前出土の木簡（五）



藤原宮跡出土木簡

と釈文を付し、公刊している。『藤原宮跡出土木簡概報』と『藤原宮』で、主要な木簡と削屑の紹介は、ほぼ尽くしているが、全点の写真と釈文・解説は、諸般の事情で公刊できずに至っていない。一日も早く、その責を果たさなくてはならない。従って、本稿で言及する木簡の釈文も、上記の二書の域を出るものではない。なお、木簡・削屑と完形加工木の全点は、橿原考古学研究所付属博物館の木器特別収蔵庫に保管しており、現在も、発掘当初の状態を保っている。一〇〇万点を優に越すかと思われる加工木片は、全て特別プールに保存しており、将来の種々の利用に備えている。その一部分は、現在保存処理の実験に供している。



藤原宮跡発掘調査地区図

## 木簡出土遺構の概況

柱穴（内裏外郭の東北角の建物SB二一〇）から出土した一点を除く他は、全て溝からの出土である。各溝について、簡単に説明を加えよう（七九頁の発掘調査地区図を参照）。

**SD一〇一** 藤原宮の幹線溝であるSD一〇五の東一八・一mの所を、それと平行して北流する幅一・九mの溝である。木簡は、FG二六—J地区では、東から流れこむ小溝SD一〇二との合流点で二〇点、FG二六—En地区では、宮域の北限を画する掘立柱列SC一四〇の北側から、二六点の木簡・削屑を、ほぼ一括して検出した。FG二六—En地区出土の木簡に、和銅三年の年紀を記すもの(1)があり、また、両地区ともに、古い時期の木簡を出土しないことから、SD一〇一は、比較的新しい時期に掘られ、平城遷都まで利用されていた溝と考えられる。

**SD一〇五** 朝堂院中軸線の東約一五〇mの所を、内裏外郭に沿って北流し、宮域の北外掘SD一四五に注ぐ最大幅五・六mの大溝である。発掘調査地区は、大きく二つに分かれる。南のFG二六—J、FG二七—C地区と、北のFG二六—Dn・Ds地区である。南地区では、大きく三度の流路の変更があり、木簡の大半は、溝の東寄りを流れる新しい溝から出土した。この両地区出土の木簡のうち、「評」と記すものが比較的多く、「郡」と記す木簡はわずか三点のみで、SD一〇五そのものが、比較的古い溝であることを示している。

FG二六—J地区からは三二〇点、FG二七—C地区からは一九三点の木簡の出土をみた。

南地区から、約五〇m隔たったFG二六—Dn・Dsの北地区では、Dn地区から木簡三七八点・削屑三六一点が出土した。Ds地区は、わずか二点の木簡が検出されたに過ぎない。Dn地区では、東西に走る柵列SC一四〇が検出されている。SD一〇五が、SC一四〇を潜る地点の南北に、堰が設けられており、特に、北堰東岸際からの出土が顕著であった。この地区では、SD一〇五は三層に分けられるが、北堰東岸際では、上層から、大量の木簡・削屑・加工状木片が集中して出土した。それも、溝のながれに直交する状態で検出されているので、ある時期に、一括して投棄された可能性が大きい。その時期は、「太寶三年」の年紀を記す(6)がみえるので、大宝三年を余り隔たらない時期と考えられる。そして、それに代って、東に新しくSD一〇一掘られたものと推測されている。

**SD一七〇** 宮域の東を画する掘立柱の柵列、SC一七五の東一八mの所を、北流して、SD一四五に注ぐ幅四mの大溝で、藤原宮の東外堀に相当する。約五〇点の木簡が出土しているが、発掘面積に比し、その出土点数が少ない。年紀を記す木簡はなかった。

**SD一四五** 宮域の北を画する掘立柱の柵列、SC一四〇の北一七mの所を、西流する大溝で、藤原宮の北外堀に相当する。FG二六—C地区と、その約四〇m西方のFG二六—A地区で、検出され

8 木簡の釈文・内容

SD-101

(1)     從七位上桑原

(2) 之依智郡 ☐ ☐ ☐ ☐ ☐

•  $\mathbb{M}_{\mathbb{Q}}^{\times}$   $158 \times (12) \times 3$  033

年紀を記載した木簡としては、FG二六—DN地区で、(3)の辛酉年

(3) 「百代主菱」  
百代<sup>〔作力〕</sup>  
×

・「辛酉年三月十日」 $\square \times$  (146) $\times$ (10) $\times$ 3 019

(4)

「乙未年」  
「雀マ」  
「雀力」

171×37×4 031

(5)  $\times \square$ 年四月  $\times$  乙未年四月  $\times$   $(108) \times (14) \times 4$  081

(6) 太寶三年  $(154) \times (27) \times 3$  081

(7) 「熊野評私里」  $83 \times 17 \times 2$  032

(8) 「海評海里軍布」 127×26×5 031

(9)  $\left[ \begin{array}{c} \text{海評海里} \end{array} \right] \left[ \begin{array}{c} \text{ } \end{array} \right]$   $104 \times (14) \times 3$  031

(10)  $\times \square$  妻倭国所布評大  $\square$  里  $\left[ \begin{smallmatrix} \text{野} \\ \text{力} \end{smallmatrix} \right]$  (152)  $\times$  (13)  $\times$  5 019

(11)  $\begin{bmatrix} \text{三方} \\ \text{耳五十戸土師安倍} \end{bmatrix}$   $\begin{bmatrix} \text{評} \\ \text{V} \end{bmatrix}$   $166 \times (13) \times 5$  03

(12) 「次評鴨里伊加」 78×31×3 03

- (13) 「□□□長田評鴨里鴨マ弟伊×  
・同佐除里土師マ得末呂 (144)×(13)×3 019  
〔柯カ〕〔評カ〕  
〔V〕旦波國□佐□× — (29)×3 039
- (14) 「荒玉評赤□里」  
・丈マ右末呂 124×25×4 051
- (15) 「V□□評男田□軍布菰」 179×(12)×4 031
- (16) 「V海評海里伊加廿斤V」 101×26×4 031
- (17) 「三方郡□餘戸× (61)×29×2 019
- (18) 「V紀甲郡松淵里才小列マ万呂 (139)×15×6 039
- (19) 「V周吉郡□軍布菰」 117×(19)×5 031
- (20) 次に、内裏との関わりを伺わせる内容を持つ木簡が比較的多く、注目される。その傾向は、南のFG二六—J、FG二七—C地区に著しい。官司を記す(21)の他、(24)の大君、(25)の「大御」の表現は天皇に関わるものであり、県犬養三千代を示すかと思われる(26)の表記法等、注目すべきものが目につく。
- (21) ×□官貢奉□×〔菰カ〕 (127)×(13)×4 081
- (22) 膳職白主菓餅申解解× (166)×(9)×5 081

- (23) 「 中務務× (155)×(13)×2 019
- (24) 「 大君 (117)×(14)×4 059
- (25) ×□二大御菰二大御飯筍二巫□× (146)×(13)×2 081
- (26) 「三千代給煮□× (131)×28×3 019
- (27) ・×□奉入 此宮酢盡」 (225)×22×5 019  
・必今日還奉入」
- こうした傾向は、北のFG二六—Dn地区においても、若干認めることができ、(29)には、天武天皇の嬪の一人であり、忍壁皇子や磯城皇子の母である擬媛娘(穴人娘)の名がみえている。
- (28) ・×□官□× (60)×(11)×4 081  
・×造酒司×
- (29) ・「穴人娘賜□□□〔田比カ〕長鮑□□□〔列〕  
・日魚中古 (Yb) (162)×30×6 019
- FG二六—Dn地区で、SD一〇五が東西柵列SC一四〇を潜った地点に、北堰が設けられており、ここから大量の典葉寮関係木簡と削屑が出土した。一括して投棄された状態であり、この地区の北に接する路東二四条二里三一坪・三三坪の小字が、「テンヤク」天

- 83

〔本草集注上巻〕

・「黄芩二兩芷白芷二兩×」 (164)×(21)×2 019

(45) 蘭官× (78)×(17)×3 059

(46) ×蘭司× (49)×(10)×1 081

(47) 鴨<sup>〔所謹カ〕</sup>傳申四百代得次三百代<sup>〔中カ〕</sup>」

・「百代得次五百代中二百代<sup>〔得カ〕</sup>」百代<sup>〔中カ〕</sup>」 155×14×3 011

SD一七〇

内容的に注目すべきものは少なく、「評」「郡」を記す次の二点に留まる。

(48) 〔▽〕□□若佐国小丹生評× (86)×(14)×3 039

(49) ・×三野國本<sup>〔須郡十市カ〕</sup>□□□□×

・×<sup>〔凡カ〕</sup>米五斗 (102)×(7)×5 081

SD一四五

SD一〇五と共に、出土点数が多く、内容的にも豊富である。乙未年(持統九年)、己亥年(文武三年)、大宝二年十一月、和銅二年の年紀を記す(60)~(64)、潤八月二十九日と記す(59)(潤月から、和銅二年と考えられる)、評・郡の記載のみえる(60)~(70)の他、上流のSD一〇五から流れこんできたと思われる、内裏に関わりを持つ内容の(72)と(73)、

典業寮関係の(74)~(76)がある。(73)の宣命は、内容的にも表記法の上からも、とりわけ注目されよう。

(50) 〔▽〕乙未年木夷<sup>秦人倭里</sup>」 113×(17)×4 032

(51) 〔▽〕己亥年十月上挾國阿波評松里× (175)×26×6 039

(52) ・「己亥年若佐国小丹×」

・「三家里三家首田末<sup>〔呂カ〕</sup>×」 (106)×25×5 019

(53) ×□□□□太寶貳年拾壹月<sup>〔諸カ〕</sup>」 (192)×(12)×5 019

(54) 〔▽〕和銅二年」 220×(6)×5 011

(55) 〔▽〕潤八月廿九日□× (156)×(10)×5 081

(56) 〔▽〕加夜評□□□× (105)×22×3 039

(57) 〔▽〕与射評大贊× (83)×17×6 039

(58) 〔▽〕<sup>〔飲袂カ〕</sup>評若倭マ柏」

・「五□乎加□」 109×18×4 032

(59) ×下□野國芳宜評<sup>〔毛カ〕</sup>× (134)×(10)×4 081

(60) 〔▽〕上毛野國車評桃井里大贊鮎▽」 177×25×7 031

(61) 〔▽〕次評鴨里鴨マ止□身軍布▽」 103×33×3 031

- (62) 〔知夫利評<sup>三田里石マ</sup>真<sup>支軍布宮</sup>〕  
116×22×5 031
- (63) 〔熊毛評大贊伊委之煮〕  
136×21×4 031
- (64) ×國後木評 〕  
(85)×24×4 019
- (65) 〔吉備中國下道評二万マ里〕  
・〔多比大贊 〕  
185×9×6 031
- (66) 〔阿尼里知奴大贊 〕  
269×25×7 031
- (67) 〔三川国波豆評<sup>篠カ</sup>嶋里<sup>一斗五升</sup>〕  
197×20×5 031
- (68) 〔評上マ里 〕  
121×15×5 031
- (69) 〔海評海里<sup>大カ</sup>里<sup>里カ</sup>〕  
78×18×3 031
- (70) ×<sup>大カ</sup>マ<sup>里カ</sup>大<sup>大マ</sup>眞目  
仲郡 吉田里人  
〔裏面に習書あり。また、同一断片かと思われるものに、「常<sup>道カ</sup>」と記すものがある。〕  
(122)×(25)×3 081
- (71) 〔知夫利郡由良里軍<sup>布カ</sup>〕  
×<sup>縣主荒</sup> 皇子宮<sup>皇子宮</sup> 〕  
(108)×25×3 039
- (72) ×<sup>大</sup>大<sup>大</sup>荒<sup>荒</sup> 物マ荒人<sup>三カ</sup> 〕  
(167)×(7)×10 019
- (73) ・×<sup>御命受止食國々内憂白</sup> 〕  
・×<sup>止詔大</sup><sup>御命カ</sup> 乎諸聞食止詔 〕  
(181)×(11)×3 019
- (74) 〔商陸柒斤〕  
81×24×5 032
- (75) ×物部刀良風病×  
(115)×(15) 091
- (76) 〔松羅五斤〕  
87×18×2 032
- その他、大贊の記載のあるもの(60)(63)(65)(66)(77)が注目される。SD一〇五からは、大贊記載の木簡は出土していない。また、官人の上番歴名的なもの(79)と(80)がある。(79)は、内裏あるいは典藥寮に関わるものかもしれない。書状形式として注意されるものに(81)と(83)があり、習書ではあるが、(84)は当時の官人達の切実な実感がこもっていて、共感を誘う。
- (77) ×大贊鮎×  
(65)×27×3 081
- (78) ・<sup>土師宿祢廣庭</sup> 土師宿祢川麻呂 〕  
・ 右四人 〕  
253×(16)×3 011
- (79) 〔二月廿九日春日<sup>里女</sup>妹<sup>姉津女</sup> 大<sup>長女</sup>床<sup>女</sup> 女長<sup>留カ</sup> 〕  
<sup>舌</sup> 女<sup>布カ</sup> 〕  
268×29×2 011
- 〔表面に「執」の習書、裏面には「執」「根」の習書と「根連石末呂」の人名がみえる〕



